

---

# 霸者

朱音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

霸者

### 【著者名】

朱音

### 【Zコード】

Z4802A

### 【あらすじ】

ここは太陽と月の間の星、アルタ。現在の西暦、今までの歴史は一切不明。そんな不思議な星に住もう少年、千羅は、少年にして最強の強さを誇る、アルタの中で唯一独立した存在だった。そんな彼だったが、彼はその強さを望んではいなかった。

## 第一章

「・・・私相手に雑兵如きをよこすとは・・・私も随分となめられたものだ」

赤い鮮血が彼の頬から滴り落ちる。彼の強さはもう誰の手にも負えない程になっていた。

「もう誰も私を止めることはできない。せいぜい足搔くがいい」そう言つて恐ろしい表情で笑う彼の瞳の奥には、何故か涙が見え隠れしているようにも見えた。

「だがもし・・・もしも私を止めることができたのならば、私は・・・」

悲しそうな、絶望的な表情で、彼はある筈もないことを呟いた。

「」は太陽と月の間の星、アルタと呼ばれていた。西暦や、今まで辿ってきた歴史は一切不明。誰もが調べようとするしない。彼等にはそんなことは関係ないのだ。彼等にとって歴史とは、生きていくつえで必要としない、小さいことだった。この星に住まう生命は、フレアと呼ばれる一足歩行で羽の生えた生き物のみだった。かつては沢山の生命が闊歩し、生命に満ち溢れた美しい星だったと伝説に残されているが、いつの日か、異常なまでに急速に進化した生命のみが生きることが出来る、空虚な星へと変わつていった。

彼の名は千羅といった。人々は彼の白く美しい、狐のよつな姿から、彼を「白狐」と呼んだ。

白狐の千羅 アルタを駆ける銀色の風

千羅はアルタに住まう数千万のフレアの中で、最強と呼ばれ、唯

一独立した存在だつた。  
今までの強さを疎んだ。

アルタのフレア達はみな、千羅のその異常  
なかつたのに・・・

## 第一章（後書き）

皆様はじめまして！初めての投稿です。まだまだ至らぬところばかりの私ですが、どうぞ暖かい眼差しで見守っていて下さい。ご意見、感想等メッセージを送っていただけるとともにありがとうございます！これからも続きを頑張っていきたいと思つておりますので、これからもよろしくお願い致します。

## 第一章

何もかもが暗いから、旅に出ようと思つた。何も変わらぬはな  
いけれど、それでも、希望だけは捨てられなかつた。希望を抱いて  
も仕方がないと分かつてはいても、どうしても捨てることが出来な  
かつた。あの日、あの時から

千羅はふらりと旅に出た。彼は風の様に気紛れで、つかみ所がな  
かつた。

千羅は行く当てもなく、ただ歩き続けた。少し経つと、一人の少  
女が水辺で魚を観察しているのが見えてきた。千羅は何故だか分か  
らなかつたが、自然と少女の方へと足が進んだ。そのまま千羅は少  
女の目の前まで行つた。

少女は誰かの気配に気がつくと、顔を上げ、

「・・・あら? こんな所に私以外のフレアが来るなんて、珍しい  
こともあるものね。初めまして! 私はこの近くに住んでいる、こと  
りつていいます。」

千羅は何故か、初めて出会つたその少女に懐かしさを感じた。

咲き誇る桜の下で、こちらを向いて笑つている者がいる。もう随  
分と昔の記憶だ。笑つてゐる者の顔は、ぼんやりとしか思い出せな  
い。何故こんな事を思い出すのかと、現の夢を見ながら千羅は思  
つた。ひょっとしたら、こどりという少女に笑つてゐる誰かの面影  
を感じたからなのかもしれないと千羅は記憶をめぐらせた。

「私は千羅。今住んでいる土地を離れて、旅をしてくるといふだ

千羅は無表情で言った。彼はあまり表情が変わらない。そのせいで無愛想なのだとよく言われる。しかし、ことりはそんなことは気にも留めなかつた。

「千羅つて・・・あなた、もしかして『白狐』！？」

「ああ、そうだが？」

千羅はため息混じりに言った。彼がその名を出せば、ほとんどの者は怯え、それ以上何も言う事はなくなつた。だから千羅は自己紹介が嫌いだつた。しかし、

「うわあ、すごい！本物初めて見たよ！！旅の途中なんでしょう？ よかつたら私の家でお茶でも飲んで行かない？」

ことりは嬉しそうに笑つてそう言ったのだ。千羅はそんなことを言われた事がなかつたので、驚き、どうしたらいいのか分からなくなつた。

「千羅、驚いてる！噂で聞いていたのとは全然違う人だね！まあ、噂なんて初めから信じてなんかいなかつたけど」

そう言ってことりは千羅の腕を掴み、千羅の返事を聞かぬまま、千羅を自分の家まで引っ張つて行つた。

## 第一章（後書き）

皆様こんこひちは 第一章で御座います。楽しく読んでいただけたでしょうか？？少しでもあ、これ楽しいなと思つていただけたら嬉しいです。次の章も頑張つていきたいと思つておりますので、応援のメッセージなどいただけると本当にありがとうございます！では、次の章でお会いしましょう

## 第二章

（私は何故こんな所でのん氣にお茶など飲んでいるのだろうか・・・）

「ことりの家は、一人で住んでいるにしては、広い家だった。綺麗にかたずけられているからと、いうのもあるのだろうが、生活に必要な物が殆ど置かれていない為、家の広さがより一層目立つた。

「ところで、千羅は風を自由に操れるって聞いたけど、それって本当なの？」

「ことりは興味深そうに言った。

「ああ。それは本当だ。私の力は風を操る力だ。お前の持つている力は何だ？」

フレア達はみな、特別な力を持つて生まれてくる。アルタのビニにある、「生命の樹」という神のよつた樹がフレアに不思議な力を与えるのだそうだ。その力のことを、フレア達は「生命の絆」と呼んでいる。そして、「生命の樹」に特別愛された者は、自然を自由に操ることのできる力も持つて生まれてくるのだといつ。つまり、千羅は「生命の樹」に特別愛された存在なのだ。

「私？私は、防御とか、回復とかそういう力と、あと炎を自由に操ることのできる力だよ」

千羅もことりも、お互い驚いていた。「生命の樹」に特別愛された存在が一人いるということだけでも驚くことなのに、その一人が出会ったというのは、まだ聞いた例がなかった。

『聞いた？この近くに、‘紅凰’の異名を持つフレアが住んでるらしいよ。何でも炎を自在に操れるとか』

『じょうおう？』

『紅い鳳凰って意味らしいよね。でも、会つたって話はあんまり

聞いたことないよ。』

女性のフレアたちがそんな噂をしていたのを小耳に挟んだことがあつた。その時千羅はざうせ嘘だろ？と思つていたのだが、まさか本当の事だったとは……。

これが二點目だ。

「実は、私ね……。

そして、ことば話を出した。

「私、今14歳なんだけど、

「私、今14歳なんだけど、10歳までの記憶が少し欠けてるんだ。思い出せることも少しはあるんだけど、何故か一番大切な部分の記憶が欠けているの。自分の名前も、何て名前の場所に住んでいたのかも思い出せない。だから、ことりつて名前にしたんだ。いつか、大空を自由に羽ばたけるくらいの大物になりたいと思って！初対面の人にはこんな事話すのもなんだと思ってたんだけど、千羅といふと何だか懐かしいような感じがして……」

ことりの話こ、千羅は何かが引っかかった。

「！－おさかづ、お前！」

驚愕した表情で千羅がそう言った時、外から大きな音が聞こえた。

「あ、『めん千羅！』私ちょっと様子見てくるから、そこで待つてーーー！」

深刻な表情で、ことりは駆け出していた。

「こんな誰もいなこよつた所に、普通のフレアが来る筈ないよつ！」

千羅に聞こえないよつ、小声でひとりは言つた。  
「随分とお早い追つ手なことだ」  
ため息混じりにそう呟き、千羅は立ち上がつた。

「小娘、お前狐の尻尾と耳のある、白髪のガキ見なかつたか！？」  
ことりを見るなり、大柄な男が言つた。

(・・・千羅のことね)

「私、先ほどから家におりましたので、悪いけれど分からぬわ  
「見え透いた嘘などつくなよ？小娘。俺の力は匂いを探知する能  
力だ。お前からはあのガキの匂いがプンプンしてやがる。さあ、さ  
っさと白狐の居場所を吐け！！」

「フンッ！アンタの能力、ハッキリ言つて犬みたい。どうせなら  
もつと素敵でかつこいい力もえたら良かつたのにねつ！それに、  
アンタみたいに礼儀も知らない男に、千羅の居場所なんか言うワケ  
ないでしょ！？」

「こ、ンの生意氣小娘、言わせておけばっ！」

男はもうカンカンだ。それに対しことりは至つて冷静で、静か  
に相手を見ていた。

「あら？私とやり合ひ気？もつ少し弱い相手と遊んでいれば？言  
つとくけど私、アンタなんかよりよっぽど強いわよ？それに、私礼  
儀の分からぬ無礼なヤツが、この世で一番嫌いなの。見ていてイ  
ライラするわ」

男が持つていた剣を振り上げ、一人が戦闘態勢に入ろうとしたそ  
の時、木陰から声がした。

「そこまでだ」

## 第二章（後書き）

皆様こんにちは！遅くなつてしましましたが、第二章が完成致しました～！ことり、怒ると口調が変わります。でも、何だか二重人格っぽいですね（汗　こんな筈では・・・。

## 第四章（前書き）

遅くなつてしまつて本当に申し訳御座いません（^\_^）繁忙でした為、なかなか執筆できず・・・更にネタギレで困り果ててしまつておりました事も御座いまして・・・。待つていて下さつた方、お待たせ致しました。第四章、楽しんでいただけたら光栄です^\_^

「そこまでだ」

木陰から、千羅が姿を現した。わざと向う変わる」との無い無表情で。

「せつ、千羅！！」

「じりは目を丸くして言つた。

「『』登場だな」

男がにやつと笑つて言つ。千羅は感情の抜け落ちた目で男を見据える。

「私に用があるようだな。言つておぐが、手加減はしないぞ」

千羅がそう言つた瞬間、彼の体から凄まじい殺気が溢れた。ことりも男も驚愕する。そしてゆっくりと千羅は顔を上げる。千羅の瞳を見た瞬間、あまりの恐怖にこどりは息が出来なくなつた。その瞳は、灼熱の炎を宿しているかのような壯絶な力を秘めていた。

「ほう。白狐に間違いない。お前に用があつて來た。単刀直入に言つ」

男は一呼吸おいて、

「「生命の樹」より仰せつかつてきた。△白狐△お前を「生命の樹」の元へと連れて行く」と言つた。その声は低く、静かに脳に響いた。千羅は相手を警戒しつつも、疑問の表情をする。

「何故「生命の樹」がそんな事を・・・？」

抑揚の無い声で、千羅は静かに、抱いた疑問を口にする。ことりは突然のことに驚くばかりで、話についていけていない。

「時空嵐がなんたらとかおつしやつていたぞ。あと、「紅凰」も連れて来いとおおせつかつている

千羅はちらりとこいつを見、そして男と見ると、思案して沈黙した。

「千羅……」

「…………分かった。行こう」

「こりは悲しそうな顔をする。そして決心したのか、

「私が『紅凰』連れて行くなら早くしなさい！」

「小僧と小娘がそろって……？不思議なこともあるものだ。小娘、それが嘘だつたとしても、「生命の樹」の偉大なるお力の前では無意味だぞ」

そう言うと男は大地に何かを描く。描かれた何かは光り輝き、強い光に一人が思わず目を瞑る。

「一人が目を開くと、そこには輝く一つの見たことも無い程大きな樹があつた。

「これが、「生命の樹」……」

「こりは生命の樹の美しさに見とれている。

千羅は辺りを見回したが、先ほどまでいた男の姿が見当たらない。

「見て千羅！樹が「歌つてる」よ！！」

「こりの声を聞き、千羅は「生命の樹」を振り返った。

「ポオン ポオオン……」

「生命の樹」が幻想的な音楽を奏でる。まるで樹が歌っているかのような光景に、千羅は言葉を失った。

「生命の樹」はその間の歌い続ける。樹が音を奏でる度に、光が波紋を作るようにならう。

「樹・・・生命の、樹・・・・・」

虚ろな瞳でことりが「生命の樹」を見上げる。

「ことりつー?」

突然ことりの体が宙に浮かんだ。ことりを掴もうとした千羅の手が空を切った。

「くつー! 一体何が」

「我、く紅凰>なり。「生命の樹」よ、我に力をー!ー」

ことりがそう言った瞬間、ことりの周りを七色の光が包んだ。そして光がことりを包み込むと、ことりはゆっくりと降りてきた。

「千、羅・・・? 私・・・・・」

ことりは不思議そぞろきよろきよろ辺りを見回した。すると、どこからか声が聞こえてくる。反響してうまく聞き取れないせいか、声は降つてくるように感じられた。

『白狐、紅凰、时空を覇する者となれ。六つの宝玉とクリスタルを探し出せ』

「宝玉? それつ

ことりが訊く間も無く、竜巻のような風が一人を襲つた。

「あやあああああーーーーー!」

『時が やつてきた・・・』

千羅は確かに、誰かの声を聞いた。

意思の強そうな、それでいて澄んでいるとても美しい声で、確かにそう言つたのだ。

人の心を揺り動かすように、聞いたことも無い声で・・・

「きやあっ！…」

ひとりの叫び声で、千羅は現実に引き戻された。

目の前には神社のような建物がある。

「ここ、何処・・・？」

ひとりは不思議そうに辺りを見回す。まるで神社そのものを見たことが無いかのように。

「なんだろう、これ・・・何だか、懐かしい」

神社の賽銭箱に触れながら、ひとりは小さく呟いた。

辺りを見回すと、大きな桜の木があった。千羅はその桜を見た瞬間、ひどく頭が痛んだ。

「なつ・・・」

『千羅君・・・・・

ざああああああああ・・・・・

大雨のように降り注ぐ桜の花弁の中で、小さな女の子が呼んでいる。心底嬉しそうに笑って、こちらに手を差し伸べている。顔はもやがかかっていて、よく見えない。

だが、相手の顔が見えなくとも心が温まるのを感じた。

覚えのある景色・・・・・

そしてそれは、

今自分が目にしている景色・・・・・

「思い出した！」「

突然千羅が叫ぶので、ことりは驚いて飛び跳ねた。

「なつ何！？どうかしたのツー！？」

千羅はことりを見て、本当に懐かしく感じた。

『千羅君・・・』

耳に心地よく響いたソプラノの高音は、今となつても向う変わつなく心に響く。

あの時、この場所で聞いた、綺麗な声。  
千羅がまだ、幼かつた頃の事。

## 第五章（後書き）

更新ホント遅くてすみません><  
皆様こんばんは お待たせ致しました。第四章で御座います。  
つて、短ッ！ 短いよ！ 何コレ！？  
こんな筈では。 。 o r z

## 第六章

私がまだ、幼かつた頃・・・

私も中で、最も温かい記憶・・・

私の傍には、いつも私と同じ年の少女がいた。  
名前は、どうせいつても思い出せない。

その少女は、いつもとても楽しそうに笑って、私を迎えてくれた。

そしてそれは、今も・・・

「千羅、ビビビビうしたのっーー？」  
もの凄く驚いた表情でことりが問いかける。  
「…………ことり、私はお前に言わなくてはならないことがある」  
真剣な表情で千羅は言った。ことりは困ったような顔をしたが、  
すぐににっこりと微笑んだ。  
「うん。聞くよ。なあに？」  
「本当かどうかは分からない。飽くまで仮定だからな」  
「うん」  
ことりにしつかりと念を押すと、千羅は話し出し始めた。  
「…………お前は、もしかしたら、私と同じ“地球”から来た人  
間かも知れない」  
「えつ…………意味が、良く分からない。地球って、何…………？」  
ことりは何とか言葉を口にしている。  
「アルタに隠された歴史…………誰も気づかないし、必要とし  
ていらない過去…………それを今からお前に話そう」  
千羅は記録を読み上げるように、淀みなく話し出す。  
「今から約百年前、この惑星は、“アルタ”ではなく、他の名前  
で呼ばれていた。それが“地球”だ。私は昔のお前を知っている。

お前は私と同じ、過去から来た人間だ

「過去・・・・・」

「とりが千羅の言葉を反芻する。

「お前は、謎の竜巻に攫われたんだ。そして、助けようとした私も一緒に巻き込まれた。そうして辿り着いたのが、ここだ」

「たつ・・・・・まき・・・・・・・・・・・・」

「とりは無表情で小さく呟いた。

「なん・・・・・だろ・・・・・竜、巻・・・・・・・・・・・・」

カツ！！

突然千羅の体が光り輝き、体の内から透明なクリスタルが現れた。

「何だ、これは？」

「おいで・・・私の、キオク・・・・・・・」

見えない何かに引っ張られているかのようになど、とりはクリスタルに向かってフラフラと歩き出した。

ぱあああああ

クリスタルが消え、とりが前に倒れこんだ。千羅がしつかりと  
ことりを受け止める。

『千羅君つ一緒に遊ぼうよ..』

『こひちに来ては駄目！貴方まで巻き込まれてしまつ！..』

あの時、竜巻に飲まれる直前、小さな女の口はそう言つていた。

『僕は君を助ける！』

必死だつた。少女の悲痛な叫びも聞こえず、竜巻に立ち向かつて行つた。

『千羅君――――――――――――――』

その後はもうずっと、離れ離れだつた。

あの時の少女とまた出会い、一緒にいられることが、千羅にとって、とても幸せなことだった。

喻えその少女が自分のことを忘れていても・・・。

## 第六章（後書き）

「んばんは 最近重要な事を沢山お話しなくてはならないので内容  
が短くなりつつあります。申し訳御座いません（。・。・）第六章、  
千羅とことりの秘密の一つが明かされております。もしかしたら口  
レが一番重要な秘密かな？でも、そんなこともないこむ。。  
とにかく、皆様に楽しんで頂ければ幸いです。

## 第七章（前書き）

今回わざと長めにしてみました

楽しんで頂けると光栄です

## 第七章

「う・・・そ・・・私が、過去から来た・・・？」  
ひとりは絶句していた。

「でも、私、ずっと前から貴方のこと、知ってる・・・」

千羅の瞳を、ひとりはじっと見つめる。

「瞳の輝きは、何年経っても変わらないね」

そう言つてひとりはにっこりと微笑んだ。千羅は目を丸くする。

「ひとつ、お前、記憶が！？」

千羅の言葉を聞いたひとりは、悲しそうな顔をして、首を横に振った。

「ううん。でも、わたくしので記憶の一的部分が取り戻せたんだ」

「そうか・・・」

『あらあ～？』おんな所で、私がずっと探してた人達に会えるなんてねえ～』

突然、空から声が降ってきた。

ザザザザザ

ふわつ・・・

黒い影が、空から落ちてくる。顔などの細かな容貌は、逆光に照らされて見ることができない。

その影は、華麗に地面に着地した。

『「んこひは。時を、進めに来たわ』

長い髪、澄んだアルトの美しい声で、その影は言った。  
まるで、何かの始まりを告げるかのように、含みを帯びた声色で・  
・・。

「誰だ！？」

影は静かに歩み寄る。長いストレートの髪が靡き、風のなすがま

まになつてゐる。

「普通は自分から名乗るものか～？が、でも今日のところは別にいいや。私は貴方たちと、同じよ」

明らかに不安そうな表情で「」と口には訝ねた。

「まあた分からなし？私も貴方達と同じ『生命の樹』に特別愛された・・・・と呼ばれているのかしら？神子の一人なのよお～」  
軽い口調のその口調とは裏腹に、影に目が慣れやつと良く見える  
ようになつた彼女の瞳は全く笑つていない。

燃えるような灼眼が、品定めをするように一人を見る。千羅に動じる訳でもなく、ただ静かに注がれる視線を見返していた。

「アバウト」

「河」

呻うめき声でこゝりとは言つた。灼眼の少女は愉快ゆかいそうに口端を吊つ上げた。

前回何をした？

千羅が威嚇するように強く言ったが、少女は表情を崩すこともなければ、返答することもない。

「メモ」

ことりが急に静かになつた  
きみよう

を増幅させた。そのせいか千羅は手に汗をかいていた。

「さがたに」  
「さがたに」

「…」  
ひとりが幽霊でも見るような表情で灼眼の少女を見た。  
声が微か  
かす  
に震えている。

「あなたは、誰…………？」

少女は凍つた目つきで笑った。そして静かに燃え上がる二つの瞳

でことりの瞳の奥を覗き込む。

「貴女の質問にはさつき答えているわ。愚問ねえ～。うふふふつ  
酷く虚ろな笑い声が木靈する。ぞつとするよつた響きで。

「違う！ そうじやない。あなたは、何者・・・・・・？」

少女が口元に浮かべた笑みを崩すことはなく、意味ありげな笑み  
を浮かべたままで、少女は言った。

「今私は貴女の質問に答えない。ま、せいぜい自分で考えてえ～」  
特有の軽い口調でそう言つと、少女の声のトーンが少しだけ下が  
つた、ようにはじられた。

「貴女は信じてはいない。信じていない者に、真実は見出せない」  
千羅は訝しげに眉を寄せ、少女を見た。

「何が言いたい！？」

静かだが厳しい口調で千羅問つ。しかし少女はうつすらと楽しそ  
うに微笑んだだけで、その問いに答えようとはしなかつた。

「自分で答えを導き出さねばならないことよお～。私が教えてあ  
げる程安い問い合わせ～。うふふつ。さあて、そろそろお  
暇致しましょ～か。S a l u t !  
〔いつまへやうなかつ〕

言つが早いが、少女は跳躍すると、一回転して木の枝に飛び乗つ  
た。

「待て！」

千羅も跳躍して近くの枝に飛び移つた。

「C - e s t l - h e u r e ! 炎王！…」

ことりが呆気にとられている。

「フランス語だな。時間だ、と言つた」

ことりに訊ねられる前に、先手を打つて千羅が言つた。

「へえー。よく知ってるね」

ことりが暢気なことを言つてゐる間に、突然現れた炎に千羅が襲  
撃を受けていた。

「チツ！ 何だコイツは！？」

炎はうねりながら形を作り、炎の狼が現れた。

「気分がいいのか？　・・・」

炎が少女に訊ねるが、肝心な名前の部分が聞き取れない。

「S i , pourquoi pas ?」

炎の狼が笑つた。

「そうか。それは良かつた」

「くそつ！厄介だな<sup>やっかい</sup>」

歯噛みしている千羅に、<sup>ためら</sup>ことは躊躇いなく質問をする。

「せんらー、何て言つてるのー？」

千羅が答える前に、余裕の笑みを浮かべた少女が答えた。

「・・・・・そうね、悪く無いわ」

そしてについつと微笑むと、少女は言つた。

「A bientôt j' espere ! Au revoi

「・・・・・え？」

「くつ！-！」

千羅は狼との戦闘に集中していて、会話が耳に届いていない。

「近いうちに、また会いましょう？じゃあね

## 第七章（後書き）

皆様こんばんわ～～お元気でしょうか？第七章で御座います。今回フランス語が出てきますが、正直結構大変だつたりします～～フランス語の知識が全然無いので；おかしいところが多くあるかと思いますが、広い目で見てやって下さいまし。

## 第八章

おいで おいで 手を繋ごう  
一人寂しく時の中 誰かを探しに行きましょう  
誰も知らない時の中 時を戻しに行きましょう

いこう いこう 知らない明日へ

一人寂しく時の中 誰かを探しに行きましょう  
誰も知らない時の中 時を進めに行きましょう  
私は一人時の中 誰かをずっと待っている  
私は一人 悲しみを分かつ仲間を待っている

探しに行こう 時の中 一人寂しく行きましょう・・・

呪文とも、歌ともつかない声が、静かに響いた。

静かなアルトの美声で語られる言葉は、空虚な響きを持っている  
ように感じられた

「千羅、やつきの人・・・」  
「恐らく、『生命の樹に特別愛された者』神玉保有者だろう」  
淡々と述べる千羅。  
「じゃあもしかして」  
「お前の予想は恐らく当たっているだろ?」

「だよね。炎の狼さんいたし、“炎の神玉”は、あの子かな」  
「『生命の絆』ではあんなに強力な意思を持つ炎は創れない。あれは、飽く迄予想の範疇はんとうだが神玉に宿る神の姿ではないかと私は踏んでいいる」

「神様！？」

「ことりは目を丸くした。神信じてはいるが、神玉に神が宿るという千羅の予想はにわかに信じられなかつたのだ。

「だから、“神玉”なのだろう？」

「そつか。・・・・・ところで神玉って何？」

千羅はこけそうになつた。

「お前・・・・・そうか、知らないのか。神玉というのは、私達神子が『生命の樹』から授かつた神の力のことだ」

「あ、なんだかそれ、知つてる・・・・・」

「『神は、こう言つて私達八人に力を授けた。

「変える力を・・・」

「ここじゃない、どこか、不思議な場所で」

千羅とことりの声が重なつた。

「知つてる。覚えてるよ。水色の髪の神様が、私達に丸い何かをくれたのを」

言いながら、自分でも驚いているようだ。ことりは目を丸くしている。

「本当かー？では『生命の樹』が言つていた“宝玉”とは神玉のことなのか！？」

ことりは嬉しそうに手を叩いた。

「そうだよ！きっと八人の神子を探せばいいんだねーー！」

「まだまだ先の長い旅になりそうだ」

「うん。でもきっと、楽しい旅になると思うよー！」

ことりはにつこりと天使のように微笑んだ。



## 第八章（後書き）

遅くなつてしましましたが、霸者、第八章で御座いますへへ短くなつてしまましたが、楽しんでいただけたら光栄です

## 第九章

水色の髪、透けるような白い肌。

顔は見えなかつたが、声だけは聞けた。

鈴のような透き通る美しい声で紡がれた言葉の断片を、おぼろげながらも覚えている。

『変える力を……』

他にも何か言つていたけれど、それはもう覚えていない。記憶に  
靄もやがかかっているかのように、思い出すことができない。

「さて、これからどうするの、千羅？」  
ひとりの問いかけに、千羅はすぐに答えを返す。  
「とりあえず、今のところは何もしない」

「JJたちは予想外の答えに相当驚いたようだ。田をまん丸くしている。

「何もしないのー?」

叫びに近い声で言わられて耳がきんきんしたが、千羅は平静に頷いた。

「ああ。あの炎の少女、必ずまた私達の前に姿を現すはずだ。闇雲に動き回ると逆効果になる恐れがある」

「JJたちは感心したように何度も相槌を打つた。

「そつか。そう考えると何もしない方が得策かもしねえね」

「とりあえず今分かっている者を優先しよう。他はその後だ」

「うん。じゃあ、またあの子が現れるまでの間、ここいら辺で沢山遊ぼうね!」

楽しそうなJJJとに、千羅は曖昧な笑みを浮かべることしかできなかつた。

がさつ

すぐ近くの茂みから、草を搔き分ける音がした。

千羅はすぐに警戒態勢をとり、JJJを庇つように自分の後ろにさがらせる。

「誰か、いるの・・・?」

茂みから出てきたのは、金髪碧眼の少年だった。まだ幼さの残る面差しに、低くなりきつていいない声。恐らく千羅たちと同じ年くらいだろう。

「私は千羅。お前は誰だ?」

少年は警戒している千羅達に困ったような顔をした。

「怪しい者じゃない。僕はルフナ。この近くに住んでいるんだ。よろしくね」

少年 ルフナは笑みを浮かべ、手を差し出した。

千羅はすぐに警戒を解き、差し出された手を握った。

「私、ことりー！よろしくね」

ことりもにこにこと笑い、握手をした。

「キミ達はどこから来たの？」こら辺の住人じやないよね？」

微笑みながら訊ねるルフナに、千羅とことりは顔を見合せ困った顔になつた。

「それがね・・・」

どこまでを話してよいのか図りかねたが、結局一人はすべてを話した。

「・・・と、いう訳なの」

ルフナはすつと黙つて聞いていた。何か考え込むように眉間に皺を寄せている。

「僕と同じ・・・？」

ルフナが小さくもらした言葉を千羅は聞き逃さなかつた。

「同じ、だつて・・・？」

「僕も、ある女の子と二人で嵐に巻き込まれたんだ」

「ある、女の子・・・？」

千羅と鈴音は同じ事を考えたが、いや、まさかな、とすぐにその考えをかき消した。

「うん。とっても優しい女の子。ちょっと、キミに似てるかな」にっこりと微笑みかけられ、鈴音は驚く。

「え、わ、私！」

ルフナはにこにこ頷く。

「ではあの少女でないことは確実だな

・・・確かに。

「あの少女？」

「うん。人目をひきつける灼眼が特徴的だったよね

「灼、眼・・・？」

千羅が頷く。

「もしかして、・・・？」

ルフナが何か言つたが、声が小さすぎて聞き取ることができなか

つ  
た。

## 第九章（後書き）

ちゅうじゅうじゅうじと少しあくしずつ更新してたら、ウン日以上更新していませんになってしまっておりました！待っていて下さった皆様、本当に申し訳ございません。ごめんなさい。

## 重要なお知らせ

皆様新年明けましておめでとう御座います！

いよいよ2009年の幕開けですね！初夢に茄子と富士山と鷺が出てくると演技がいいらしいですね。ちなみに私は一度もそんな夢見たことありません・皆様はどのよくな初夢を「」覧になりましたか？

＾＾

さて、改めましてこんばんは、朱音です

唐突に申し訳ありませんがこの度私は重大な決断を致しました。

実はこの小説、「霸者」ですが、朱音が中一くらいの時に書き始めた長編小説「霸者」を、あまりに長いので短くまとめようとしたりニユーアル？版にあたります。（名前変わつてないですが…）

しかし無理に短くまとめようとしてしまった為、途中で行き詰つてしましました。

私の方でこれ以上この小説を書き続けるのは無理だと判断した為、大変勝手ながらこちらのニユーアル？版「霸者」はここまで打ち切りにしたいと思います。

今まで楽しみに読んでいて下さった皆様、大変申し訳御座いません。

変わりに、本当の「霸者」にあたります原作をほんの少しだけ読みやすく変えたものを、かなり長編になると 思いますが少しずつ書いていこうと思います。

出てくる登場人物はこちらの「霸者」とをして変わりません。只、ことりと千羅の出会いが少し違つていたりと、大まかな設定に変わりはありませんが細かなところが全然違っています。  
それでもいいと仰つて下さる方は、今後執筆予定の「霸者」の原作にも目を通して下さると幸いです。

今年は忙しい一年となりそうですが、昨年度は全然更新できなかつたので、暇を見繕つて少しずつでも更新を頑張つていてこうと思います。これは今年の目標とこうことで・・・

新年早々突然の打ち切り、申し訳ありません。

これからも朱音の小説を読んでいただけると嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4802a/>

---

霸者

2010年10月17日06時40分発行